

守屋荒美雄と帝国書院

「地理教育の父」の足跡を旅する

伊藤 智章

第2回 高梁（たかはし）川のほとりで－岡山県倉敷市

JR 山陽本線の倉敷駅と、新幹線の新倉敷駅の間に「西阿知」（にしあち）という小さな駅がある。ここから西に10分ほど歩くと、高梁川に達する。守屋荒美雄（幼名荒三：あらぞう）は、明治5年（1872年）、この川の近くの西原村（現：倉敷市西阿知町西原）で、農家の第三子として生を受けた。

今でこそ倉敷のベッドタウンとして、また米や“い草”、そして日本のマスカット栽培発祥の地として知られる高梁川下流域であるが、荒美雄が生まれた当時は、治水も十分でなく、度重なる洪水に悩まされていた。昭和16年に刊行された『守屋荒美雄傳』の著者も、「緒言」の冒頭で「肥沃ではあるが、梁川は数々氾濫して、耕土を洗い去り、まま人畜さえも損なふのであった」と記している。

当時の地形図を見ると、高梁川は大きく二つの流れに分かれ、西阿知村には「中島」や「中州村」といった地名が見られる（図1）。東側を流れていた旧河道は埋められ、現在はその上を水島臨海鉄道が走っている（図2）。明治元年（1867年）にも大洪水があり、荒美雄が生まれた時代は、幕末の動乱と水害からようやく立ち直ろうとする時期だった。

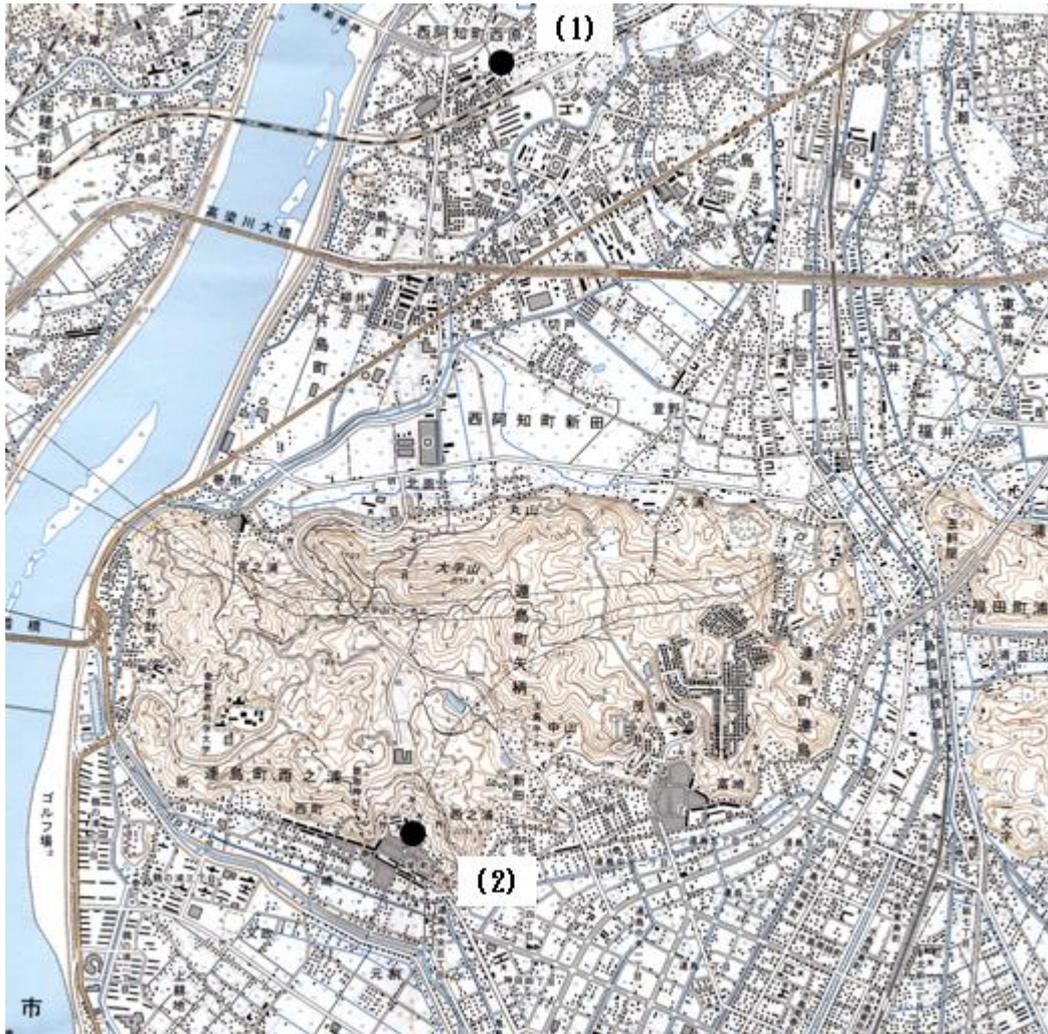


図1 倉敷市西阿知町付近 (2万5千分の1地形図「玉島」)

(1) が西阿知小学校 (旧西原尋常小学校), (2) が西浦小学校 (旧西之浦高等小学校)



図2 大正末期の高梁川下流部 (5万分の1地形図「玉島」大正14年修正)

守屋荒三は、西原と西之浦にまたがる大平山の山道や高梁川の堤防の道を毎日往復した。

高梁川を渡った対岸、西阿知集落を一望でできる場所に、荒美雄と、父鶴松、母飛天（ひで）の墓がある（写真1・写真2・写真3）。



写真1（左） 墓所より高梁川越しに西阿知集落を望む



写真2（中央） 守屋荒美雄の墓 東京・府中カトリック墓地にも墓がある。



写真3（右） 父 守屋鶴松，母 飛天の墓

父、鶴松は、若いころから幕末の混乱や、災害に伴う治安の維持や窮民の救済に奔走した。本名の「守屋鶴松」よりも「岡田屋太助」の屋号の方が通りがよかったらしい。義理人情に厚く、もめ事を放っておけなかった父は、遠くからも頼りにされ、長く家を空ける事も多かったようであるが、墓に刻まれた戒名に「奨学院嚴教任侠居士」とあるように、子供達の教育には非常に熱心で、義理人情を大切にする父だったようである。

後年、荒美雄は東京の自宅の近くに岡山県出身者の為の学生寮を建てた。表立っては干渉せず、書生一人一人の様子を寮母から聞くことに徹し、たまに顔を出した折には、国訛り丸出しで議論を戦わせる書生たちと語らうのを何よりの楽しみにしていたという。自身も受験した中等学校地理教員の資格認定試験である「文検」の受験者の支援を会社ぐるみで行い、自ら学校を起こした上何十校もの私立学校の理事や相談役を務めた荒美雄の面倒見の良さ、義理堅さは、父親譲りなのかもしれない（写真4）。

西阿知小学校

JRの西阿知駅から歩いて5分ほど行ったところに倉敷市立西阿知小学校がある。正門を入ってすぐ左に、守屋荒美雄の銅像がある（写真4）。守屋荒美雄が没した1年後の昭和14年（1939年）11月に「守屋先生記念會千六百餘名」（台座に刻印）によって建立された。建てられた当時は、等身大の立像だったようだが、しかし、戦時中に金属供出に出され、現在は胸像になった。地球の形の台座の上に置かれた胸像は、向かい側に立つ、二宮金次郎像と共に子供たちを迎えている。



写真4 西阿知小学校の銅像

西阿知小学校は、彼の最初の母校である「西原村尋常小学校」がルーツである。荒三には、他に兄と姉がいたが、早世したため、彼は唯一の男の子として大切に育てられた。ただ、体が弱く、病気がちであったため、母は学齢期になっても息子を学校にやらず、ようやく9歳になって隣村の尋常小学校（寺の本堂が教室）に送り出した。ほどなく自村にできた新しい「西原尋常小学校」ができると、そちらに移り、14歳まで学んだ。

後に帝国書院を起こした後も荒美雄は頻繁に故郷を訪れ母校の講堂や、駐在所の建物を寄付した。現在、体育館になっている場所には、講堂の礎石が残されている（写真5）。



左：写真5 守屋荒美雄が母校に寄贈した講堂（『守屋荒美雄傳』より）

右：写真6 体育館の側に残る講堂の礎石（西阿知小学校にて）

案内を頂いた校長先生によると、この地域は三世代同居が多く、地域の方々が何かと小学校の運営に力を貸してくれることが多いという。特に庭木の手入れに関しては、一つ一つ「担当」が決まっているほどで、常に美しく選定されている。また、地域のボランティアが運営する将棋教室が盛んで、小学生たちが熱心に将棋を学んでいるという。現在、児童数は916名（平成22年）、1学年6学級だが、宅地化が進むにつれて児童数も増えており、グラウンドにはプレハブ校舎があった。

最初は穏やかに学校や地域の説明をされていた校長先生だったが、筆者が本書を書く

動機「パワフルな先人の伝記を記すことで、近頃疲れて元気がない同業者を励ましたい」の一言に、校長先生の目の色が変わった。「先生方は疲れてないですよ！少なくとも、うちの学校の先生方は、子供達と家族のように接しています。こここの地域の方は本当によくしてくれるし、元気の源は何と言っても子供達です！」熱い教育論を打つ校長先生に、「西阿知のDNA」を見る思いがした。

大平山と西ノ浦

西阿知尋常小学校を卒業した荒三少年は、小学校高等科への進学を親に切望する。ただ当時、村には高等科はなく、最も近い高等小学校は、村から2里（8km）南の西之浦村まで行かなければならなかった。西原村から進学したのは荒三ただ一人だった。

西原村から西ノ浦へ向かうには高梁川に沿って南下する事もできるが、両村を隔てる「大平山」（162m）を越えるのが最短距離である。『守屋荒美雄傳』によると、荒三少年は、和服に下駄ばきで、常に本を開きながら山道を歩いて通ったという。

徒歩ではないものの、大平山に登ってみた（写真7）。西阿知から高梁川沿いに南下して急な坂道を上ると、前夜の雨が、頂上付近では雪になって積もっていた。晴れてはいるものの、高梁川をつたって吹き付ける寒風がきつい。



写真7 大平山の坂道

山を挟んで反対側の西浦は、西阿知とは違った景観が残っている。家々の間口は広く、所々に蔵を置き、道幅も非常に狭い。西ノ浦高等小学校は、創立以来場所を動かすことなく、**倉敷市連島立西浦**（つらじませいは）小学校として、その歴史を刻み続けている（写真7・8）。



左：写真8 倉敷市立連島西浦小学校全景

右：写真9 校舎入口に掲げられた木造校舎時代の瓦（「西浦小学」と彫られている）

学制が敷かれて間もない頃、学校は公立といえども設置や運営の大部分は地域に任されていた。それ故に、財力のある地域では初中等教育が比較的早くから整備され、そうでない地域では、能力があっても進学を断念せざるを得ない状況があったのだろう。村唯一の「高等小学校生」だった荒三少年と、彼を送り出した鶴松・飛天夫妻の誇りとプレッシャーは、相当なものだったに違いない。ちなみに、彼の生地に高等小学校ができたのは明治31年、26歳の時である。

同じ歳の子供よりも何年か遅れて小学校を出た荒三少年が進学を志すにあたっては、本人の中にも葛藤があったかもしれない。しかし、その背中を両親が押し、彼が山道を歩き続けたからこそ、後の大「教科書ライター」守屋荒美雄が生まれ、今の帝国書院があるといえよう。

4. 青年教師の誕生

西之浦で18歳まで学んだ荒三は教職を志す。当時、教員になるには、師範学校（4年制）へ進むのが一般的だったが、経済的な問題を解決することができなかった。そこで彼は、小学校教員の資格認定試験に在学中から挑戦する道を選んだ。

当時は、次々に学校が設立される一方で、教員養成のシステムの整備が追い付かない過渡期であったため、文部省は教職を志す若者に各種の資格認定試験を用意していた。荒美雄がまず挑戦したのは、教員助手（授業生）試験である。「授業生」と言ってもれっきとした職業資格で、今でいうキャリアアップを目指す尋常小学校の教員の受験が多かったようである。荒三も試験会場で、かつて尋常小学校で教わった教員に会っている。『守屋荒美雄傳』によると、数十人の受験生があり、合格者は13人だった。

19歳での資格認定試験に合格し、西浦高等小学校を卒業するとそのまま西浦高等小学校の教員見習いとして採用された。待遇は日給5銭。初任給として40銭を受け取った青年教師は、山道を歩いて帰ってそれを神棚に祀り、両親に感謝したという。

順風満帆に見えた教員見習い生活。給与をもらいながら勉強を続け、正教員資格試験に合格すれば師範学校卒と同じ待遇が保障される。前途洋々に見えた生活が始まった。しかし、青年の希望は、わずか1年足らずで打ち砕かれた。不本意ながらも辞職した彼は、仕事の当てもなく、郷里を離れてしまうのである。

次回につづく。

伊藤 智章 (いとう ともあき)

静岡県立吉原高等学校教諭

1973年 静岡県生まれ

立命館大学大学院地理学専攻博士前期課程修了

著書『いとちり式 地理の授業にGIS』（古今書院）

GISや防災、地域振興と地理教育などに関する論文・コラム多数。

ホームページ「いとちりポータル」

<http://www.itochiri.jp/>